

## A-1 学校研究

### I 研究主題

生徒一人一人を生かした確かな学力の育成  
～知識・技能の定着とその活用を生かして～

### II 研究を進めるにあたって

本校では、これまでの3年間で「コミュニケーション能力の育成」について様々な取り組みを行い、一定の成果があったと思われるが、「読む力」「書く力」についてはさらに実践を充実させることが大切であると考えられた。そこで、今年度は PISA 型読解力の育成を基本にし、「読む力」「考える力」「書く力」を総合的に高めていくことが大切であると考えた。

この PISA 型読解力で育成する学力については、「読解のプロセス」として次の三つに整理されている。

- (1) 情報の取り出し・・・テキストに書かれている情報を正確に取り出す。
- (2) 解釈・・・書かれた情報がどのような意味をもつか理解したり推論したりする。
- (3) 熟考・評価・・・テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結びつける。

この三つのプロセスは、学習活動として捉えると「受信する→考える→発信する」ことになると考えられる。学習の中に、このプロセスを入れた授業をすることが大切であり、こうしたことを通して一人一人の知識や技能を定着させ、それを活用することを通して一層の学力向上を図ることが重要であると考えている。(平成19年度 金沢錦丘中学校 公開研究発表会 研究紀要より抜粋)

### III 教科研究テーマ

「創造行為としての鑑賞」 ～見て、感じ取り、自分の言葉で発信する力の育成～

### IV 教科研究の重点

美術の学習では、表現活動と鑑賞活動とが表裏一体となり、互いにそれぞれの活動を補完している。これまでの美術学習では、ともすれば表現活動に重点が置かれがちであったが、鑑賞活動の重要性が見直されてきており、これまでとは違ったアプローチが試みられるようになった。

鑑賞の学習では、生徒が美術作品を見ることを通して、対象のよさや美しさを豊かに感じ取ること、作者の表現意図や造形上の工夫を味わったり、美術文化について理解したりするなど、思いを巡らせながら見方を深めていくことが求められる。その学習過程においては、生徒が自分の気づいたことを言葉にして表し、発表したり聞いたりすることによって、新しい見方に気づき、考えを深め合うことや、文章で記述することによって考えをまとめたりする活動がよく見られる。その際、造形的な面の意識付けをせずに感想を書かせると、美術的な内容とは関係の薄い、単なる感想文に陥ることがあるので十分に留意する必要がある。

実際に授業を行うにあたって、色や形などの造形的な要素をおさえて作品から受ける印象などを語っていくことが大切であり、そのためには造形に関わる言葉で考えさせ整理させることも重要である。造形言語で表現することによって、美しさの要素が明確になったり、見る視点が整理されたりすることがあり、美術の鑑賞の能力を高めるためにも必要なことであろう。そこで、対象のよさや美しさ、作者の表現意図や造形上の工夫など自分の感性で自由に感じ取ったものを、互いに語り合ったり記述したりする活動を通して、美術作品を読み解く力を養うことができるようにしたいと考えた。